2020 年 1 月 1 日発行

点訳通信

103号

日本ライトハウス情報文化センター
点字製作係
発行責任者　竹下　亘
〒550-0002　大阪市西区江戸堀 1-13-2-8F
TEL 06-6441-1028（点字製作係直通）

昨年は令和元年という節目の年となりました。皆さんにとっても、さまざまな出来事があったことと思います。私も、数々の「初」となる経験や出会いがありました。

本年は東京オリンピック ・ パラリンピックが開催されるほか、 日本の点字制定１３０周年にも当たります。何かが起こる予感。今から注目しつつ、また皆さんにお知らせしていきたいと思います。

本年も、どうぞよろしくお願いいたします。　　（点字製作係　奥野真里）

(C) WANPUG

【 休館等のお知らせ 】

１月　７日（火）　ボランティア活動再開
１月１１日（土）　開室（振替休館日ですが、点字製作係は開室します）
２月１１日（火）　休館（建国記念日）
２月２２日（土）　開室（振替休館日ですが、点字製作係は開室します）
３月２０日（金）　休館（春分の日）
３月２７日（金）　休室（ボランティア交流会のため点字製作係は休室します）

１月１０日（金）～４月３日（金）
点訳ボランティア養成講習会中級コース開講（全１１回）

藤野高明氏の講演会を開催～点字の唇読（しんどく）で切り開いた人生に学ぶ

「障害者は不幸ではないのか？！」

（点字製作係 主任 奥野 真里）

１２月１４日、当館点字製作係の主催で開催した藤野氏の講演会には約３０人が参加。重厚な内容を明るく、軽やかに語られるお話しに引き込まれた。

開始早々、藤野氏から私たちに投げかけられたのは「障害者は不幸にあらずという言葉は、本当にそうなのだろうか？」という重い問いかけ。その問いは、戦災で障害を負ったご自身の経験にあるという。小学二年生の夏、米軍の不発弾を何も知らずにいじっていたところ、突然暴発し、一瞬にして視力と両手首から先を失った。

奇しくも、藤野氏の実家は福岡県立盲学校（当時）の近くにあり、見えなくなる前から盲学校の存在を知っていた。ただ、まさか自身が視覚障害になるとは思いもよらなかった。点字の触読ができず、三療の職に就くことも難しいという理由で、盲学校への転入を拒否された藤野氏は教育を受けられないまま、眼の治療のため入院。そこで入院中の盲学校の生徒から点字を教えてもらう。点字が合理的な規則で作られていることを知り、面白くなり、瞬く間に吸収していった。さらに勉強への意欲が芽生えた。

また、ハンセン病療養施設での体験を元にした小説「いのちの初夜」を読み聴かせてもらったことが、社会の障壁に立ち向かう力を与えてくれた。

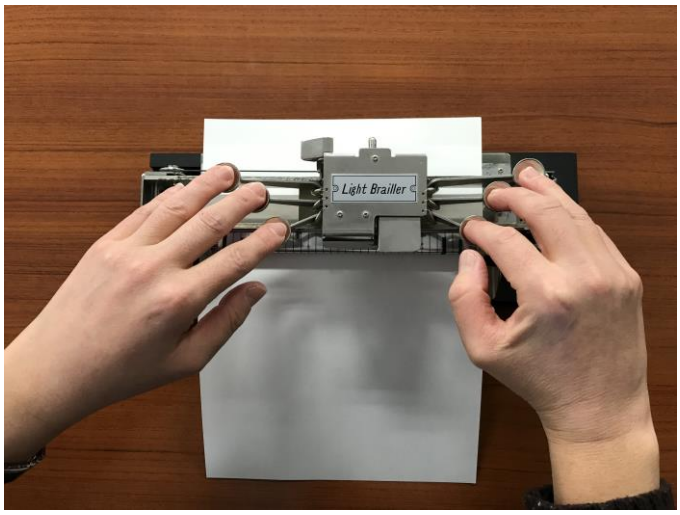
点字の唇読と粘り強い努力で障壁を突破

２０歳の時、ようやく大阪市立盲学校（当時）の中学部二年に転入。そこで大きな出会いが待っていた。点字の唇読である。当初は読み取りにかなり時間がかかった。しかし、“習うより慣れろ”で、徐々にスピードを上げていった。学習意欲も旺盛で、勉強が楽しくて仕方がなかった。やがて大学受験を目指し、障壁を乗り越えて入学・卒業。教員資格を取得し、大阪府の高校・世界史の教員採用試験に合格したが、障害を理由に配属が決まらず、結局、採用期限切れとなった。だが、交渉して再受験のチャンスを獲得。そして、ついに大阪市立盲学校への赴任が決まった。

点字を指で読む人に比べると、唇読は断然遅い。加えて、どうしても下を向いて読むため姿勢が悪くなる。

講演会では、実際に藤野氏が点字の読み書きを実演してくださった。点字を読む時は上唇で読み取る。腕で用紙を支えながら文字を読み取っていく。指先で読む時も同様だが、唇が荒れるとまったく読めなくなるため、日頃からケアに努めているそうだ。

一方、書く時はライトブレーラー（右の写真）というタイプライターを使用する。六つの点を両肘を使ってタイピングしていくが、ここにも工夫があった。例えば、「ク」を書く場合、初めに①④の点を打ち込み、①の点を押さえたまま④を打ち込んだ肘をスライドさせて⑥の点を加点する方法である。時間がかかるのではないかと想像していたが、実際はかなり早い速度でタイピングされていた。



このように、さまざまな工夫を重ねて、30 年余り教職に打ち込んで来られた。

先日、盤寿(81 歳)を迎えられた。将棋や音楽観賞が趣味という藤野氏は、今も活発に活動されている。「障害者は不幸であることに違いはないが、障害者だからこそ経験できたこともたくさんある。いろいろあったけど、私は人に恵まれ、今の自分があるのだと思う」と振り返られた言葉が胸に響いた。

２０１９年度　第３２回専門点訳講習会「理科、算数・数学コース」のご案内

「点訳のてびき」などの改訂にともない、理数点字表記も改訂されます。当館では従来の規則からの変更点を学習するため、毎日新聞大阪社会事業団との共催で専門点訳講習会を開催します。

日　　時：２０２０年２月２７日（木）、３月１２日（木）１０：００～１５：００
講　　師：福井哲也氏（日本点字委員会専門委員、日本ライトハウス点字情報技術センター所長）
定　　員：３０人（申込み多数の場合は抽選）　　受講料：１，０００円（資料代）
対　　象：理科もしくは算数・数学を点訳されたことのある方
会　　場：当館４階会議室　　持ち物：筆記用具
申込方法：申込書（点字製作係で配布）をメールまたはＦＡＸで点字製作係まで送付。
　　当館ホームページ「講習会・体験会」からもお申し込みいただけます。
申込締切：２０２０年１月３１日（金）
問合せ・申込先：当館点字製作係
　　ＴＥＬ　０６-６４４１-１０２８
　　ＦＡＸ　０６-６４４１-１０３６
　　Ｅメール　ｔｅｎｊｉ@ｉｃｃｂ．ｊｐ

教科書点訳連絡会セミナーで算数学習の導入を学ぶ

（点字製作係　主任　奥野　真里）

１２月７日（土）午後、当館で第３０回教科書点訳連絡会セミナーが開催された。前半は、「理科、算数・数学の点字表記について」というテーマで、間もなく改訂される理数の点字表記について、日本点字委員会専門委員の加藤俊和氏と、福井哲也氏のお話をうかがった。

（詳細は、間もなく発行される「理科点字表記解説２０１９年版」、「数学・情報処理点字表記解説２０１９年版」でご確認ください。また、当館でも専門点訳講習会「理科、算数・数学コース」を開講する予定です。）

後半は、大阪府立大阪北視覚支援学校の宇治丸（うじまる）　幸（みゆき）先生から、小学部の児童向けの算数学習の導入についてお聴きした。まず、点図の線を指でたどる練習。小学校一年時にはまだ物体の位置関係を理解する力が身についていないので、「左右」、「上下」、「手前、向こう」など、言葉とその位置がしっかり合致するよう学習し、「左から右へ」と線をたどっていく。最初は単純な線たどりだが、段階を上げていき、渦巻きになったり、線が交差したりするようになる。図に触ることに慣れていない児童には、複数の線が交わっている中から一本の線を見つけ出し、たどることは難関であるという。簡単なことのように思えるが、日々の練習が必要なのだ。

次に、珠算について取り上げられた。低学年で筆算を学ぶ場合、その仕組みや計算方法を理解できたとしても、視覚障害児童が点字で筆算を行うことは技術的に困難である。そこで、スムーズに計算ができる方法として珠算を学ぶ。算盤の使い方を学習する中で位の繰り上げ・繰り下げ、暗算などを身につけて計算力を高めていく。

今回の研修ではこの二つの指導内容が発表され、参加者は、晴眼児童のように一目瞭然とはいかない視覚障害児童のための算数学習の導入や工夫点を知ることができたとともに、当日映像で紹介された授業の様子に、深く感銘を受けた。

(C) WANPUG